

## 絵本にみるクリスマス (2)

—降誕物語を中心に—

尾上明子  
菊地伸二

### はじめに

キリスト教保育、またキリスト教幼児教育に携わる者にとって、子どもがキリスト教の行事をどのように受けとめ、どのように捉えているかということ考察することは極めて大切なことである。特に、その行事がキリスト教の中で本質的なものであればあるほど、その重要性が増すことは言うまでもない。私たちはこれまでにキリスト教においてもっとも重要な行事であるクリスマスに焦点をあてて、特に、その中からサンタクロースを扱った絵本を取り上げて若干の考察を行った<sup>(1)</sup>。

この論文では、クリスマスの中で、その中心にある「イエスの誕生」を直接に扱った絵本<sup>(2)</sup>を対象とする。そこで、主題は「絵本にみるクリスマス (2) —降誕物語を中心に—」とし、以下、次のような順序で論を進めることにしたい。

#### 第一章 降誕物語とは何か

- 1 いわゆる降誕物語
- 2 『マタイによる福音書』をベースにした降誕物語
- 3 『ルカによる福音書』をベースにした降誕物語

#### 第二章 降誕物語のリスト

- 1 リストの作成にあたって
- 2 リスト
  - (1) 絵本
  - (2) 聖書物語

#### 第三章 絵本にみる降誕物語 (1) —その全体的考察—

#### 第四章 聖書物語にみる降誕の出来事

#### 第五章 絵本にみる降誕物語 (2) —その個別的考察—

- 1 「いわゆる降誕物語」に即した作品
- 2 『マタイによる福音書』、『ルカによる福音書』に即した作品
- 3 降誕物語の登場人物の立場から描かれた作品
  - (1) 子どもや動物たちの立場からみた作品
  - (2) 『三つのクリスマス』
- 4 降誕物語を扱っているがかなり独創性の高い作品
  - (1) イエスの生涯と関わりをもつ作品
  - (2) 現代と関わりをもつ作品
  - (3) 伝説を絵本化した作品
  - (4) 『もう一人の博士』

おわりに

## 第一章 降誕物語とは何か

降誕物語、それはクリスマスの出来事を中心にあるイエスの誕生を描いたものであるから、降誕物語を描いた絵本はクリスマスの絵本の中で中心を占めることは言うまでもないことである。ところで、私たちは降誕物語という名のもとに、どのようなストーリー、また情景を思い浮かべるであろうか。まず最初にしばらく文章を引用することにしたい。

### 1 いわゆる降誕物語

「処女マリアは、救い主となる男児を聖霊によって身ごもるであろうという神のみ告げを受け、またその子にイエスと名づけるようにと告げられます。マリアの許婚者であるナザレの大工ヨセフも夢でみ告げを受けました。ある日、ヨセフは当時行われていた人口調査を受けるため、身ごもったマリアを伴って、ベツレヘムに向かいます。道のりは遠く、旅は厳しいものでした。マリアは、ロバに乗って、ヨセフはその手綱を引いて歩きました。折悪く、ベツレヘムの町の宿屋はどこも混んでいて、二人を泊めてくれる宿はありません。ようやく、馬小屋の片隅を与えられます。その夜、マリアは男児を生み、そのみ子は飼葉桶に寝かされます。

一方、東方の三賢者はひときわ明るい星に導かれて、イエスを拝みにやってきて、それぞれ黄金、乳香、没薬を贈り物として捧げます。また、羊飼いたちは天使に率いられた天の軍勢を見ます。彼らもまた、イエスを訪ね、喜びに満ち溢れます。そして動物たちもイエスの誕生を祝福するのでした<sup>(3)</sup>。」

多少の違いこそあれ、私たちが降誕物語のもとに思い浮かべるのは大体このような情景、ストーリーではないだろうか。これが私たちに知られている「いわゆる降誕物語」と呼ばれるものである<sup>(4)</sup>。

ところで私たちは、この「いわゆる降誕物語」が元来『マタイによる福音書』と『ルカによる福音書』とに描かれており、その二つをベースにして上記の物語が誕生したことを知っている。従って、本来ならば『マタイによる福音書』と『ルカによる福音書』に基づいた物語を先に紹介するべきかもしれない。しかし実際、絵本を調べてみると、若干のものを除いてほとんどが上の「いわゆる降誕物語」をベースにしているのである。

今、私たちは〈ベースにしている〉という言葉二度用いた。つまり、一つは『マタイによる福音書』と『ルカによる福音書』を〈ベースにして〉、今日知られるところの「いわゆる降誕物語」が誕生したという場合であり、もう一つは、「いわゆる降誕物語」を〈ベースにして〉、絵本が描かれているという場合である。Aを〈ベースにして〉Bが生まれたという場合、この言葉で私たちが意味しようとしていることは、AとBはイコールではないということ、つまりAからBが誕生する際には、そこに豊かな想像力が介在しているということである。

「いわゆる降誕物語」は、『マタイによる福音書』と『ルカによる福音書』を単に機械的につなぎ合わせたものではなく、互いに曖昧なところを豊かな想像力を加えて補いながら、ひとつに結び合わせたものなのである。同様に、それを〈ベースにしている〉と言われる絵本の多くも、「いわゆる降誕物語」をそのまま描いたのではなく、作者の豊かな想像力が、絵や文の形で表現されているのである。確かにこの場合、『マタイによる福音書』と『ルカによる福音書』を〈ベースにしている〉と言われるときと同じような意味で〈ベースにしている〉ような定まった形での「いわゆる降誕物語」は存在しない。しかし私たちがここで強調したいことは、『マタイによる福音書』と『ルカによる福音書』から「いわゆる降誕物語」が生まれるときも、「いわゆる降誕物語」から諸々の絵本が生まれるときも、そこに豊かな想像力が働いているという事実なのである。そしてこのことは、『マタイによる福音書』のみをベースにして絵本が生まれる、又は、『ルカによる福音書』のみをベースにして絵本が生まれるという状況を考えてみても事態は全く同様なのである。従って、その意味では、「いわゆる降誕物語」に先立って『マタイによる福音書』をベースにした降誕物語（あるいは、『ルカによる福音書』をベースにした降誕物語）を置かなければならないという必然性は特にないのである。

ところで、「いわゆる降誕物語」が、『マタイによる福音書』と『ルカによる福音書』をベースにしながら豊かな想像力をもって補った結果、『マタイによる福音書』、『ルカによる福音書』にも書かれていない新しい要素を付加したからという理由で、この物語は信ず

るに値しないと、誠実さに欠けると判断されるならば、それは恐らく的外れの非難となるだろう。むしろ事態はその逆で、「いわゆる降誕物語」が誕生するためには、『マタイによる福音書』と『ルカによる福音書』のテキストを穴があくほどよく読み、「イエスは本当はどのように誕生したのか」という真剣な問いが向けられることが不可欠であったと思われる。そのような問いこそが豊かな想像性を働かせたのであり、それを無視しては降誕物語はその重要性を失うことになるであろう。もっともこのことは「いわゆる降誕物語」が、『マタイによる福音書』、『ルカによる福音書』を単独に扱ったものに比べ、歴史的信憑性が高いということの意味するものではない。しかし少なくとも、そこにあるイエスの誕生への真剣なまなざしを私たちが認めるときに、想像力をもって描かれた数々のものが始めて豊かなものとして、私たちに与えられるということは確かなことである。

それでは、「いわゆる降誕物語」にあって、『マタイによる福音書』、『ルカによる福音書』には見られない新しい点とは如何なるものか。以下、幾つかの点を具体的にあげてみよう。

- 1) ヨセフとマリアがベツレヘムに向かう場面で、身重のマリアはロバに乗っているとあるが、『ルカによる福音書』にはそのような言及はない。はっきりしているのは、ベツレヘムに二人が向かう時点で、マリアが妊娠していたということ、そしてベツレヘムに到着した後に、マリアが子どもを産んだということである。恐らく、そのような状態にあるマリアが歩くことは困難であったという推測がロバを登場させたのであろうが、しかしどの程度に彼女が身重であったのかということになると『ルカによる福音書』は何も語っていない。
- 2) イエスが馬小屋で生まれたということについても、『ルカによる福音書』は言及していない。はっきりしていることは、宿屋には彼らの泊まる場所がなかったということ、また布に包んで飼葉桶に寝かせたということであり、果たしてそれが馬小屋であったかどうかは明らかではないし（例えば、『ベツレヘムのうしごや』(→62<sup>(6)</sup>)では牛小屋となっている)、またもしそうだとすると、それがどのような形態のものであったかは明らかではない（例えば、『クリスマスのひかり』(→30)では洞穴となっている<sup>(6)</sup>）。
- 3) 殆どの絵本が扱っている宿屋探しのモチーフや宿屋でのやりとりも、「宿屋には彼らの泊まる場所がなかった」というところから恐らく引き出されたものであろうが、『ルカによる福音書』そのものの文には描かれていない。
- 4) ヨセフとマリアが小屋に泊まった（そのように仮定してであるが）その晩に、果たしてイエスが生まれたかどうかということについても何も語られていない。
- 5) 東の方の賢者についても、『マタイによる福音書』には新共同訳では「占星学の学者たち」と複数で記されているのみで、その名前、その出身地、その人数等について

は何も語られていない。

伝統的に三人とされるのは、彼らが「黄金、乳香、没薬を贈り物として捧げた」と三つの贈り物を捧げたので、各自一つずつと見做されたところに由来するのであろうが、何ら証拠立てるものはない。

また、その出身地についても、黄金、乳香、没薬の取れる産地から推測されたのかもしれないが、これもその域を出るものではない。また、時として賢者が王となっているのがあり、これはひとつには『三人の王さま』<sup>(7)</sup>に由来すると思われるが、王が跪くということの中に出来事の重要さ（真の王の到来というモチーフ）が示されていると言える。さらにまた、彼らがらくだで旅を続けるのも、恐らく東の方の国から遠方はるばる歩いてきたというのも困難であろうし、彼らの身分（彼らが王として描かれているときは特にそうであるが）からしても、らくだという乗り物はある相応しさが見いだされるように思われる。しかし、これも推測の域内にあるものである。

- 6) 『マタイによる福音書』に描かれている賢者と『ルカによる福音書』に描かれている羊飼いとが会うとき、そこには新たな疑問が生じる。その一つは、賢者と羊飼いとどちらが先にイエスの所へ行ったかというものである。

大半は、羊飼い→賢者の順になっており、その中のあるものは賢者たちの訪問を大分遅らせている（例えば、『クリスマスのはじまり』(→35)では賢者たちの訪問の時にはもうイエスが首が座っているとある)。また、中には、途中で両者が合流して一緒になり、三人の王様が来たことに羊飼いがびっくりするような作品もある（『クリスマスのはじまり』(→35)）。また、羊飼いと賢者（王の場合はなお一層そうであるが）との組み合わせはこの世的にみて、地位の低い人とその反対の人とがともにイエスを拝みに来たという意味で注意を引くと言えよう。すなわち、このことからイエスの誕生をすべての人々が拝んだということになるが、実は両者が共にアウトサイダー的存在であったことも銘記しておいてよいだろう。羊飼いてもユダヤの社会の中で底辺的な存在であるし、賢者も（たとえ王であるとしても）それは外国人であったからである。そしてそのような人々にこそ福音が訪れたのがこの降誕物語なのである。

- 7) 動物がイエスの誕生を目撃したことも聖書には何ら言及されていない。この出来事が世界に平和をもたらすというその性質から見ても、それは否定できないことかもしれない。また、イエスが生まれた場所（家畜小屋）から考えても、またそこに駆けつけた羊飼いたちが羊を伴っていたのではないかという推測から考えても不可能なことではないかもしれない。

## 2 『マタイによる福音書』をベースにした降誕物語

『マタイによる福音書』において、どのように降誕物語が描かれているかということの正確な記述は聖書に譲るとして、その構成を新共同訳聖書の小見出しとして記すと凡そ次のようになる。

悩むヨセフに天使があらわれる  
 マリアを迎え入れるヨセフ  
 イエスの誕生  
 東方からエルサレムに来る学者  
 学者と会見し不安を抱くヘロデ  
 学者を送り出すヘロデ  
 星に先導されて幼子の所に向かう  
 礼拝し、贈り物を献げる  
 夢のお告げで別の道を通って帰る学者  
 夢のお告げを受けエジプトに向かうヨセフと家族  
 学者にだまされて怒るヘロデ  
 2歳以下の男の子殺し  
 夢のお告げを受け戻るヨセフ  
 ナザレに住む家族

すでに前節において、『マタイによる福音書』に含まれているモチーフについてある程度述べられた。ここではそこに固有に見られる事柄を幾つか示すことにしよう。

- 1) 降誕物語の要所要所で、ヨセフが重要な役割を果たしている。ヨセフはマリアが身ごもっていることがわかり、婚約を破棄しようとするが、夢のお告げを受けて彼女を受け入れる。占星術の学者たちが帰っていくと、ヨセフは夢のお告げでエジプトへ避難するように命じられる。エジプトから戻るときもヨセフは二回お告げを受け、まずはイスラエルに、そして次にナザレに移っていく。このようにヨセフなしにはイエスはダビデの家系としてベツレヘムには生まれなかったし、仮に生まれたとしても生き延びることはできなかつたように思われるほど、彼は重要な役割を担っているのである。しかもその際、ヨセフへの夢のお告げが決定的な鍵を握っていることは興味深い。
- 2) ユダヤ人の王として生まれたイエス、その徴が東方の学者に星として示されている。東方の学者たちが幼子の所を訪ねていく場面は、恐らく降誕物語の中でももっとも絵画的な情景を与えてくれるものであるが、この星については、流れ星であるとかハレー彗星であるとか今日でも諸説がある<sup>(6)</sup>。絵本において時として天使のみ告げを受けた羊飼いたちが星を頼りにイエスの生まれた場所に向かうというもの（『ルカによる

福音書』には星は出てこないのであるが)、元来はこの『マタイによる福音書』のイメージに由来するものであろう。

- 3) ヘロデと学者の対比が描かれている。まずユダヤの中心にいる王ヘロデとユダヤの外にいる学者がイエスの誕生をめぐって対照的な態度をとる。ヘロデが「私も行って拝もう」と言っているのはもちろん居場所を知るための口実であって、その後彼は「ベツレヘムのその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を、一人残らず殺させた」のである。不安を抱くヘロデやエルサレムの人々とは対照的に、学者たちは「東方でその方の星を見たので拝みに来たので」ある。そして「東方で見た星が先立って進み、遂に幼子のいる場所の上に止った」とき、学者たちはその星を見て喜びに溢れた。このように、イエスを見て喜びに溢れる者と不安を抱き殺そうとはかる者とは、単にイエスの誕生に際してのみならず、福音書全体を貫いているひとつのモチーフとも言えるものである<sup>(9)</sup>。
- 4) イエスの誕生に贈り物を捧げるということ、これは今日私たちがクリスマスにプレゼントをあげたりするときの、そのルーツになっている一つの情景であろう。特に、「プレゼントをもらう」ということに慣れっ子になってしまっている現代日本のクリスマスにおいては、むしろ捧げることの大切さがこの箇所から強調されることが望ましいだろう。「宝物を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として捧げた。」これは、極めて高価な贈り物である。これをするのが出来たのは、王様のような存在だけだったのでという推測もここから生じたのかもしれない。しかし私たちはものの高価さ、貴重さにだけ目を奪われない方がよい。要は、どうしてこのようなものを彼らは差し出す気持ちになったかということである。つまり彼らの心の問題を見失ってはならない。このように考えるとき、学者たちが捧げたこの出来事は、天使たちのみ告げを受けて駆けつけた羊飼いたちの心の在り方と大きく重なり合うものとなるであろう。

### 3 『ルカによる福音書』をベースにした降誕物語

『ルカによる福音書』の降誕物語の構成を、新共同訳聖書の小見出しとして記すと凡そ次の通りである。

- 洗礼者ヨハネの誕生、予告される
- イエスの誕生が予告される
- マリア、エリサベトを訪れる
- マリアの賛歌
- 洗礼者ヨハネの誕生
- ザカリアの預言

イエスの誕生  
羊飼いと天使  
神殿で捧げられる  
ナザレに帰る

すでに『ルカによる福音書』に含まれているモチーフについてはある程度述べられたので、ここではそこに固有に見られる事柄を幾つか示すことにしよう。

- 1) 『マタイによる福音書』との対比で『ルカによる福音書』にもっとも特徴的なことは、降誕物語が女性の存在に重きを置きながら、あるいは女性の角度から描かれているということであろう。その中心の女性はもちろんマリアであるが、エリサベト、また他に女預言者アンナなども登場してくる。そしてここでは言葉を思い巡らしているマリアの姿が印象的である。天使が「おめでとう。恵まれた方、主があなたと共におられる。」その時マリアは「この言葉に戸惑い、一体この挨拶は何のことかと考え込んだ」とある。次いで男の子を生むというみ告げに、マリアは天使に「どうして、そのようなことがありえましょうか」と一度は反論するが、最終的には「お言葉どおり、この身になりますように」と受け入れる。ここにも言葉を思い巡らすマリアが描かれている。イエスの誕生をめぐって彼女が思うことは、マリアの賛歌となって表現される。そしてイエスが誕生した後、羊飼いたちが天使たちのみ告げを受けて駆けつけて事の成り行きを話したとき、マリアだけは「これらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた」とあるのである。
- 2) 天使のみ告げが羊飼いに伝えられたというところはそれ自体注目に値する。それは先にも少し述べたように、社会の底辺に福音が届いたことを意味するからである。また天使のみ告げを受けて、ただちに羊飼いが「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と言ったことも注目に値する。絵本の中には羊を連れて行った羊飼いの姿が描かれているものもあるが、恐らくは羊の群れを後に残して行ったのではないだろうか。大切な羊を残して行くほど大きな出来事であったという事実が浮かび上がる。さらに羊飼いはイエスの誕生という喜ばしい出来事のスポークスマン的な役割を果たしている。『ルカによる福音書』の2章20節に「羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。……羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神を崇め、賛美しながら帰っていった」と書かれている。そしてまた、その言葉に対してそれを不思議に思う者と心に納める者（マリア）があるというのも、この降誕の出来事がイエスの福音に対する二つの反応というその全生涯を貫くテーマのいわば先取りを示している意味で興味深い。



- 3) イエスが神殿で捧げられたときのシメオンの言葉は忘れることが出来ない。「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせるために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。」というのも、この言葉はイエスのこれからの歩みを預言しているからであり、ここに『ルカによる福音書』の降誕物語がイエスの全生涯と関わる地平が開かれる(→『アンデレのふしぎなよる』)。しかもこの際、シメオンが母親のマリアに言ったとあるのは、先にあげた言葉を思い巡らすマリアと関連するものとして興味深い。

\* \* \*

以上、「いわゆる降誕物語」、「『マタイによる福音書』をベースにした降誕物語」、「『ルカによる福音書』をベースにした降誕物語」と三つに分けて論じてきたが、最後に降誕物語という枠組みそのものについて少し触れておこう。

R. シントラーは、『子どもと祝うキリスト教の祭り』において降誕の出来事について次のように語っている。「イエスが生まれたとき、それは祭日ではありませんでした。……多くの年月が経った後、すなわちイエスが死んですでに数十年が経ってから初めて、誕生の物語が記述されました。イエスの生涯の初めが最初のキリスト教徒にとって重要となったのです。……その際にイエスが復活の中心にありました。誕生はこの復活へと至る生涯の出発点として重要となったのです。この生涯が復活へとつながっていくこと、そしてこの生涯が神への道を示すことのためにだけ、その始まりも物語る価値を持つものとなったといえます。<sup>(10)</sup>」

ここには降誕物語を見つめるときの重要な点が記されている。つまり、それは「なぜイエスさまの誕生が私たちにとってお祝いとなるのか」ということである。降誕物語は本来それだけで完結したものではなく、イエスの生涯全体、そして最終的にはイエスの復活との関わりの中ではじめて意味を有するのであり、復活のイエス(キリスト)という光にあてられてその降誕ははじめて光り輝くのである。このことは、復活のイエス(キリスト)に出会った者こそがイエスの誕生を本当の意味でお祝いできるのであると、解してもよい。従って、その人が如何なる仕方でイエスと出会ったかによって、その人の想像力を加えた新しい降誕物語が誕生しうるのであり、その意味では、降誕物語はその性質上、いくらでも新たに書かれる可能性を内に秘めているということが出来るであろう。

## 第二章 降誕物語のリスト

### 1 リスト作成にあたって

降誕物語を扱った絵本と聖書物語（イエス伝も含めて）のリスト作成にあたり、次のような点に注意した。

- 1) 項目については、『マタイによる福音書』と『ルカによる福音書』とを合わせた混合型を基本に考えることにした。降誕物語を扱った絵本の大半が「いわゆる降誕物語」をベースにしているためである。

『マタイによる福音書』と『ルカによる福音書』の順序に関して、決めかねる点が幾つかあるが、例えば、「ヨセフがマリアを迎え入れる」時期は、「マリアがエリサベトの所から帰った」後であるとし、「占星術の学者エルサレムへ向かう」時期は、「イエスが神殿で捧げられた」後であると判断した。また、各項目の下には、それが本来『マタイによる福音書』と『ルカによる福音書』のうち、どちらに属しているかを明示するために、M（『マタイによる福音書』の場合）またはL（『ルカによる福音書』の場合）で記すことにした。

- 2) また、聖書には叙述されていないが、多くの絵本で扱っている「宿探し」については、「ベツレヘムに向かう二人」と「イエスの誕生」の間にひとつの項目として挿入した。
- 3) 作品が各々の項目について、どの程度扱っているかを記号で表記することにした。

即ち、絵と文によって十分に描かれている場合は ◎

絵と文によってある程度描かれている場合は ○

あまり描かれていない場合は ◦

とし、まったく触れられていない場合は、無記入とした。

この表記によって作品がどの項目をどの程度に扱っているかがイメージ的に捉えられるだろう。

- 4) 作品の配列については、大きく絵本と聖書物語（イエス伝も含む）に二分し、各々あいうえお順に配列し、通し番号を付けることにした。
- 5) またこの論文において、その作品の紹介がなされたものについては番号の右上に＊を付けることにした。
- 6) また作品の情報については、原則として作（文／絵）・訳／出版年／出版社の順にすることにした。これに従わない場合は、その都度記すことにした。また特記すべき

作品については備考に記すことにした。



エジプトへの避難	ヘロデの幼児殺し	ナザレへ戻る家族	作(文/絵など)	出版年	出版社	備考
M	M	M				
			ヒルダ・エ・ロストロン(文) クライブ・アプトン(絵)	1964年	CLC 暮らしの光社	
			リンダ・パリー(文) アラン・パリー(絵) 光原百合(訳)	1995年	女子パウロ会	しかけ絵本
	○		城戸典子(文) 鈴木靖将(絵)	1978年	日本基督教団出版局	
			わきたあきこ(文) 永田萌(絵)	1985年	女子パウロ会	
○	○	○	いしもりのぶお(文) やのしげこ(絵)	1973年	女子パウロ会	
			ケース・デ・コート(絵)	1966年	日本聖書協会	
			なかむらきよこ(文) いもとようこ(絵)	1983年	女子パウロ会	
	○	○	景山あき子(文) 小池暢子(絵)	1986年	福式書店	
			西阪盾(文) 渡辺禎雄(絵)	1982年	新教出版社	
			丸山朋子(文・絵)	1993年	中央出版社	
			えびなひろ(文) わたなべきみか(絵)	1995年	女子パウロ会	
			金川幸子(文) 中村有希(絵)	1988年	中央出版社	伝説
			景山あき子(文) 矢野滋子(絵)	1995年	至光社	
			ジーグリト・ホイク(文) ウーリセス・ウェンセル(絵) 濱川祥枝(訳)	1994年	新教出版社	
			横山麗子(文) 杉田幸子(絵)	1995年	サンパウロ	
			曾野綾子(文) サリー・マシューズ(絵)	1977年	聖文舎	
			ニック・バダーワース(文) ミック・インクベン(絵) 佐藤裕子(訳)	1989年	新教出版社	
			チェレスティーノ・ピアッティ(文・絵)	1979年	日本基督教団出版局	
			セルマ・ラーゲルレヴ(文) ドミニク・ルクレル(絵) 中村妙子(訳)	1992年	新教出版社	
○		○	脇田晶子(文) たけべもといちろう(絵)	1979年	女子パウロ会	
			みやしたはんな(絵)	1990年	シーアール企画	しかけ絵本
			佐久間彪(文) かすや昌宏(絵)	1984年	至光社	

	書名	項目												
		ヨハネの誕生予告	イエスの誕生予告	マリア、エリサベトの所へ	ヨセフ、マリアを迎え入れる	ベツレヘムに向う二人	宿さがし	イエスの誕生	み告げを受ける羊飼い	ベツレヘムに向う羊飼い	み告げを語る羊飼い	イエスの命名	神殿で捧げる	占星術の学者エルサレムへ
	L (ルカ)・M (マタイ)	L	L	L	M	L		M・L	L	L	L	L	M	M
23	くりすます		○			○	◎		◎	◎			◎	○
24	くりすます		○			◎	◎	○	◎	◎	○		○	◎
25	クリスマスおめでとう					○	◎	○	◎	◎				◎
26*	クリスマスってなあに							○	◎	◎				◎
27	クリスマスになにをもらった?							○	◎	○	○			◎
28	クリスマスのうたがきこえる		◎		○	○	◎		◎	○				◎
29*	クリスマスのおくりもの								○	◎				
30*	クリスマスのひかり							◎	◎	○				
31	クリスマスのおはなし					○	◎	○	◎	○	○			◎
32	くりすますのおはなし		○			○	◎		○	◎	○			◎
33*	クリスマスのおはなし		◎			◎	◎	◎	◎	◎	○		◎	◎
34	クリスマスのちいさなほし							○						
35*	クリスマスのはじまり		◎	○	○	○	◎	○	◎	○	○			◎
36	クリスマスの話		◎		○	○		○	◎	○			○	◎
37*	クリスマスのほし								○	◎				◎
38*	クリスマスのものがたり		◎			◎	○	○	◎	○	○		◎	◎
39	クリスマスのろば					◎	◎	○	○	◎				
40	クリスマスのものがたり					◎	◎	○	◎	○				◎
41*	クリスマスものがたり					○	○	○	◎					○
42*	クリスマスものがたり		○			○	◎		◎					◎
43	クリスマスものがたり星の夜		○		○	○	○	○	○	○		○	◎	○
44	クリスマス物語集					○	○	○	○	○			○	○

エジプトへの避難	ヘロデの幼児殺し	ナザレへ戻る家族	作(文/絵など)	出版年	出版社	備考
M	M	M				
			脇田晶子(文) 鈴木悦郎(絵)	1971年	女子パウロ会	
			脇田晶子(文) やのしげこ(絵)	1976年	女子パウロ会	
			トミー・デ・パオラ(文・絵)	1982年	聖文舎	
			ディック・ブルーナ(文・絵) ふなざきやすこ(訳)	1982年	講談社	
			瀬川也寸子(文・絵)	1988年	中央出版社	
			やなぎやけいこ(文) 田中楨子(絵)	1990年	ドン・ボスコ社	
			コルネリス=ウルクスハウス(文) リタ=ヴァン=ビルゼン(絵) 高村喜美子(訳)	1978年	講談社	
			アルベルト・ベネベック(文) ロレッタ・セロフィッリ(絵) やなぎやけいこ(訳)	1994年	ドン・ボスコ社	
			ボルジェ・スベンソン(絵)	1990年	大日本絵画	
			谷 真介(文) 柿本幸造(絵)	1990年	女子パウロ会	しかけ絵本
			ジェーン・レイ(文・絵) 奥泉 光(訳)	1994年	徳間書店	
			渡 洋子(文) かすや昌宏(絵)	1995年	至光社	
			レイチェル・ピリントン(文) バーバラ・ブラウン(絵) 太田愛人(訳)	1983年	佑学社	
○		○	伊藤高清(文)	1981年	聖公会出版	
			マーカス・フィスター(文・絵) 俵 万智(訳)	1995年	講談社	
◎	○	○	フェリクス・ホフマン(文・絵) しょうのこうきち(訳)	1975年	福音館書店	
			蛸名 啓(文) 山田哲也(絵)	1993年	女子パウロ会	
			レイモンド・H・ウールシー(文) マニエル・S・ラファエル(絵) 村上良夫(訳)	1973年	福音社	
			ブライアン・ワイルドスミス(文・絵) 曾野綾子(訳)	1989年	大平社	
			トミー・デ・パオラ(文・絵) きたむらまさお(訳)	1994年	大日本絵画	
◎		○	上條滝子(文・絵)	1994年	キリスト教視聴覚 センター(AVACO)	しかけ絵本
			中村妙子(編 訳)	1979年	偕成社	





エジプトへの避難	ヘロデの幼児殺し	ナザレへ戻る家族	作(文/絵など)	出版年	出版社	備考
M	M	M				
			佐久間 彪(文) 上野泰郎(絵)	1986年	至光社	
			青木久子(文) イワン・ガンチェフ(絵)	1983年	女子パウロ会	
			アンジェラ・エルウェル・ハント(文) ティム・ジョンク(絵) 津久井正美(訳)	1991年	いのちのことば社	
			藤本四郎(文・絵)	1984年	女子パウロ会	
			ジョセ・ゴーフイン(絵)	1993年	ほるぷ出版	
			高木輝夫(著)	1981年	エンゼル出版	
			J・チャップマン(編) D・ニーランド(絵) 友枝久美子(訳)	1983年	新教出版社	
			久米小百合(文) 森 千恵子(絵)		n cm <sup>2</sup> Books	
			曾野綾子(文) ベディ・ウィンド(絵)	1977年	聖文舎	
			景山あき子(文) コンスタンチーノ・ゴメス(絵)	1981年	女子パウロ会	
			かながわさちこ(文) なかむらゆき(絵)	1985年	中央出版社	伝説
			レスリー・マクガイアー(文) キャシー・ミッチェル(絵) きたむらまさお(訳)	1993年	大日本絵画	しかけ絵本
			ヘルガ・アイヒンガー(文・絵) 佐久間 彪(訳)	1992年	至光社	
			マックス・ボッリガー(文) スチバンザヴィール(絵) 村上博子(子)	1982年	女子パウロ会	
			ゲルダ・マリー・ジャイドル(文) マルクス・フィスター(絵)	1988年	新教出版社	
	○		さとうひでかず(文) つかさおさむ(絵)	1967年	こぐま社	伝説
			ミセヤエル・リス(文) エミール・マイヤー(絵)	1986年	同朋舎	
			佐久間 彪(文) 井口文秀(絵)	1989年	至光社	
	○		金川幸子(文) 中村有希(絵)	1989年	中央出版社	伝説
			アガサ・クリスティー(著) 中村能三(訳)	1977年	早川書房	
			小塩節(文) 尾崎恵子(絵)	1976年	日本基督教団出版局	アドベント・ カレンダー
			佐久間 彪(文) 杉田 豊(絵)	1983年	至光社	

	書名	項目													
		ヨハネの誕生予告	イエスの誕生予告	マリア、エリサベトの所へ	ヨセフ、マリアを迎え入れる	ベツレヘムに向う二人	宿さがし	イエスの誕生	み告げを受ける羊飼い	ベツレヘムに向う羊飼い	み告げを語る羊飼い	イエスの命名	神殿で捧げる	占星術の学者エルサレムへ	星に導かれベツレヘムへ
	L (ルカ)・M (マタイ)	L	L	L	M	L		M・L	L	L	L	L	L	M	M
67	ほしがしらせたくりすます		○			○	◎		◎						◎
68	ほしのひかったそのばんに				○	○	◎		○	○					○
69*	ほしのひかったよる				○	○		○		○					
70	星のふる夜のシモン					○	◎	○	○	○					○
71*	ほしをおいかけて								○		○		◎	◎	
72*	三つのクリスマス (ミラ星のひかり)														◎
73*	三つのクリスマス (白い小馬のアサ)							◎							
74*	三つのクリスマス (羊飼いの少年アクブ)								◎	○					
75	みんなのくりすます						◎	○	◎	○					○
76	みんなのクリスマス		○		○	○	◎	○	◎	○					◎
77	メリークリスマス世界の子どものクリスマス		◎		○	○	◎	◎	◎	○					◎
78	もみのきのおくりもの								◎	◎					
79	やさしいひつじかい								○	◎					
80*	やどやのむすめのクリスマス						◎	◎							
81*	ろびんのクリスマス							○		○					
82	わたしたちのイエスさま		○			○	◎	◎	○	○				◎	◎

エジプトへの避難	ヘロデの幼児殺し	ナザレへ戻る家族	作(文/絵など)	出版年	出版社	備考
M	M	M				
			三木節子(文) 田中槇子(絵)	1977年	女子パウロ会	
			わだよしおみ・つかさおさむ(著)	1966年	こぐま社	
			葉 祥明(文・絵)	1991年	至光社	
			イブ・タルレ(文・絵) さとうゆうこ(訳)	1994年	女子パウロ会	
			フランチェスカ・ボスカ(文) ジュリアーノ・フェーリ(絵) おぞねれいこ(訳)	1995年	ドン・ボスコ社	
			ナリニ・ジャヤスリヤ(文・絵) 竹中正夫(訳)	1982年	日本基督教団出版局	
			ナリニ・ジャヤスリヤ(文・絵) 竹中正夫(訳)	1982年	日本基督教団出版局	
			ナリニ・ジャヤスリヤ(文・絵) 竹中正夫(訳)	1982年	日本基督教団出版局	
			三宅みち(文) かかし座(絵)	1974年	中央出版社	
			かみじょうたきこ(文・絵)	1969年		
			R・B・ウィルソン(文) 市川里美(絵) さくまゆみこ(訳)	1983年	富山房	
			中村有希(文・絵)	1994年	中央出版社	
			光原百合(文) 佐々木洋子(絵)	1992年	女子パウロ会	
			曾野綾子(文) ベディ・ウィンド(絵)	1978年	聖文舎	
			渡 洋子(文) かすや昌宏(絵)	1984年	至光社	
○	○	○	もりかずひろ(文) ふじもとしろ(絵)	1986年	女子パウロ会	

(2) 聖書物語

項目	書名	ヨハネの誕生予告	イエスの誕生予告	マリア、エリサベトの所へ	ヨセフ、マリアを迎え入れる	ベツレヘムに向う二人	宿さがし	イエスの誕生	み告げを受ける羊飼い	ベツレヘムに向う羊飼い	み告げを語る羊飼い	イエスの命名	神殿で捧げる	占星術の学者エルサレムへ	星に導かれベツレヘムへ
1	COLOR BIBLE 聖書7 イエスの生涯	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○	○			○	◎	◎
2	イエスさま		○						○	○				○	○
3	いばらの冠の王様イエスキリストの一生								◎	○			○	○	○
4	おとなと子どものための聖書物語	◎	◎	◎	○	○	◎	○	◎	○	○	○	◎	◎	◎
5	キリスト					○	○	○	○	○	○			○	○
6	学習漫画世界の伝記キリスト		◎			○	◎		◎	◎				◎	◎
7	こどものころのいえすさま														
8	子どもの新約聖書物語		◎	○		○	○	○	○	○			○	○	○
9	子どものための聖書物語					○	○	○	◎	○				◎	◎
10	イラスト子ども聖書物語		◎		◎		○	○						◎	○
11	子どもの聖書絵物語								◎	○			◎		◎
12	こどもバイブル	◎	◎	◎		○	◎	◎	◎	○	○		◎	◎	○
13	こどものせいしょ		◎	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○
14	新約聖書物語	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○
15	聖書ものがたり〈7つのおはなし〉		○		○	◎	◎	◎	◎	◎	○		○	◎	◎
16	カラー聖書物語 イエスの生涯		○		○	○	○	○	○	○	○			○	○
17	聖書物語	◎	◎	○		○	○	○	○	○	○		○	○	○
18	聖書物語	○		○		○	○	○	○	○			○	○	○
19	聖書物語		◎			○	○	○	○	○	○			○	○

エジプトへの避難	ヘロデの幼児殺し	ナザレへ戻る家族	作(文/絵など)	出版年	出版社	備考
◎	◎	○	山形孝夫(責任監修)	1986年	小学館	
○	○	○	小原國芳(作)	1974年	玉川大学出版部	
○	○	○	ノルマン・ラングフォード(文) 村岡花子(訳)	1951年	教文館	
○	○	○	セリナ・ヘイスティングス(文) エリック・トーマス(絵)	1995年	フレーベル館	
○	○	○	神戸淳吉(作)	1979年	主婦の友社	
◎	◎	◎	古屋安雄(監修)	1985年	集英社	
◎		○	なかむらきよこ(文) ほそいやすみち(絵)	1979年	中央出版社	
○	○	○	わきたあきこ(文) むらおかのぼる(絵)	1981年	女子パウロ会	
○	○	○	フィリップ・ターナー(文) ブライアン・ワイルドスミス(絵)	1974年	小学館	
○	○	○	エラ・K・リンドヴェル(文) ポールターンバラ(絵) 中嶋典子(訳)	1990年	CS成長センター (いのちのことば社)	
			ケネス・N・テイラー(作) 西 満(訳)	1966年	いのちのことば社	
○	○	◎	キャリン・ヘンリー(文) デナス・ディビス(絵)	1996年	新生宣教団出版部	
○	○	○	ライニルケンス(編)	1991年	エンデルレ書店	
○	○	○	わきたあきこ(文) やのしげこ(絵)	1971年	女子パウロ会	
○	○	○	M・フィールドハウス(文) T・ブランネン(絵)	1981年	ニューライフ出版	
○	○	○	伊藤杏里(作)	1980年	新星館	
○	○	○	サムエル・デリエン(編) 高崎 毅・山川道子(訳)	1967年	創元社	
○	○	○	山室 静(作)	1976年	偕成社	
○	○	○	山形孝夫(作)	1982年	岩波書店	

	書名	項目												
		ヨハネの誕生予告	イエスの誕生予告	マリア、エリサベトの所へ	ヨセフ、マリアを迎え入れる	ベツレヘムに向う二人	宿さがし	イエスの誕生	み告げを受ける羊飼い	ベツレヘムに向う羊飼い	み告げを語る羊飼い	イエスの命名	神殿で捧げる	占星術の学者エルサレムへ
20	聖書のはなし	◎	◎	○	◎	○	○	○	◎	◎	○	○	○	○
21	聖書	○	◎		○	○		○	○	○				○
22	聖書物語 Bible Story Book	◎	○	○	○	○	◎	○	◎	○	○		○	◎
23	聖書物語		○			○		○	◎	○	○			◎
24	聖書物語	○	◎	○	○	○	○		○	○			○	○
25	新約編 聖書名画ものがたり		○	○	○	○	○	○	○	○		○		○
26	はじめての聖書新しい約束	○	◎	○		○	○	○	○	○	○			○
27	読みきかせピクチャーバイブル		○		○	○	○	◎	○					○
28	わたしたちのバイブル		◎	○		○		◎	○	○	○			

エジプトへの避難	ヘロデの幼児殺し	ナザレへ戻る家族	作(文/絵など)	出版年	出版社	備考
			岩村信二・山川道子(監訳)	1987年	創元社	
○	○	○	岩村信二・山川道子(監訳)	1976年	創元社	
○	○	○	深江真智子(訳)	1957年	日本日曜学校助成協会	
○	○	○	P.エーリスマン(文) F.ホフマン(絵) 小塩節(訳)	1991年	日本基督教団出版局	
○	○	○	フーセンエッガー(文) ヤーヌス・グラビアンスキー(絵) 小塩節(訳)	1973年	ブックマン社	
○	○	○	河津千代(作)	1983年	ほるぷ出版	
○	○	○	小塩節 他(訳)	1993年	こぐま社	
○	○	○	ボブ・ハートマン, スジー・ポール(作)	1996年	いのちのことば社	
			遠藤周作(監修) 伊左治和弘(訳) ルネ・ベルチェ(編) アルノー・ラヴァル(画)	1981年	白泉社	

### 第三章 絵本にみる降誕物語 (1) - その全体的考察 -

ここでは、リストについての全体的な考察を試みてみよう。

さて、リストをながめてみると、「いわゆる降誕物語」は、82作品中、約半分を占めている。まず、降誕物語は、第一章で述べられているように、『マタイによる福音書』と『ルカによる福音書』をベースにしているものと、これら二つをベースにした「いわゆる降誕物語」をベースにしているものがあり、絵本の場合、ほとんどが「いわゆる降誕物語」になっている(→第五章1, 2)。

リストの項目内容別に見ると、項目の[ヨハネの誕生予告]については、ほとんど扱われていない(『かみのははマリア』(→16)のみ)。また、[イエスの命名][神殿で捧げる](→23、24、36、43)、[エジプトへの避難]、[ヘロデの子ども殺し]、[ナザレへ戻る家族]を扱っているものも非常に少ない(→3、20、36、43、82)。第一章で触れているように、聖書においては明記されていないが、[宿さがし]の項目は、作品のファンタジーをより豊かにする要素として多くの作品に取り入れられているのが特徴であろう(全作品中42作品)。また、羊飼いに焦点をおいた作品(ルカによる福音書)は、7、15、17、18、19、37、53、57、58、74、75、79 に対して、博士(マタイによる福音書)にのみ焦点をおいた作品は、61、71と少ない。また、「いわゆる降誕物語」には、さまざまなしかけ絵本も含まれており、工夫がされていることも特徴である。例えば、ページ毎にクイズやゲームのあるもの(→2)、アコーディオン仕掛けのもの(→43)、星型のもの(→21、32、56) アドベント・カレンダーになっているもの(→65)などがある。また、劇中劇の形式をとっているもの(→12、25、46)もある。

降誕物語が登場人物の立場から描かれた作品は、「いわゆる降誕物語」をベースにしてそれぞれの登場人物や動物たちの目から見た降誕の出来事として脚色されているが、だからといってこれらの作品が、降誕物語の本質から離れてしまっているという事は言えない。むしろ、主人公と自分自身を重ね合わせるという同一視、あるいは、同化する発達過程にある子どもの特性を考えると、子どもたちにとって、おなじような年齢の子どもや小さな動物が主人公であるということは、主人公とともに降誕を体験する可能性があるということである。だから、子どもの性格や好みを知って与えるならば、「いわゆる降誕物語」が淡々と進んでいくストーリーより、より幼い子どもたちには適当であると考えられる。例えば、第五章において扱わなかったものの中で、『てんしがうたうよる』(→53)は、羊飼いの少年(及び父親)とこひつじが中心に置かれ、他の羊飼いたちとともに主の降誕に



出会うもので、静かな喜びが伝わる作品であり、『ぼくもいってみよう』(→66)は猫が、『クリスマスのろば』(→39)は、ろばが同じような経験をしているのである。

降誕物語を扱っているがかなり独創性の高い作品としては、(1) イエスの生涯と関わりをもつ作品(→3、14、47)(2) 現代と関わりをもつ作品(→69)の両者は数としては少ないが、それぞれの作者の独自性が強く現れている作品として注目したい。(3) 伝説を絵本化した作品(→12、55、60、63)は、『世界のクリスマス伝説集』<sup>(11)</sup>と『キリスト伝説集』<sup>(12)</sup>を原本としている。

絵本は、ストーリーはもちろん、絵が更に重要な役割を演じていることはいうまでもないことである。絵が美しいもの、個性的なもの、工夫を懲らしているものなど芸術的な作品が、年々出版されていることは喜ばしいことである。特に、降誕物語が世界中の絵本作家のファンタジーをかきたてる永遠のテーマであることに違いはない。多くの作家たちは、自分自身の信仰の証しとして、心を込め二千年前の神秘的な出来事を現代に引き寄せて見せてくれるのである。

#### 第四章 聖書物語にみる降誕の出来事

この論文では、あくまでも絵本が中心に考察されているので、聖書物語についてはごく簡単に記すことにしたい。

さて、その聖書物語、またはイエスの生涯を扱ったイエス伝において降誕の出来事を見ようとする場合、絵本の場合と事情が少し違うことに注意しておく必要がある。

確かに、聖書物語においては、その中心に福音書の記述が描かれており、その中心はイエスであることは明確であるが、しかしそれはイエスの行ないや言葉を含めたその全生涯の記録とも言うべきものであって、必ずしもそれがイエスの生涯という歴史的な見方だけに限られるものではない。またイエスの生涯を扱ったイエス伝の場合でも、降誕の出来事はそのものとして独立して描かれるというよりは、その全生涯の中のヒトコマとして描かれているのである。

実際、聖書に従えば、イエスの誕生を扱ったのは『マタイによる福音書』と『ルカによる福音書』であり、しかもその叙述に大きな違いがあるので、聖書物語の中には、『マタイによる福音書』によればこうである、『ルカによる福音書』によればこうであると極めて客観的に描いているものもある。

聖書物語やイエス伝は、基本的に聖書に準拠して、できるかぎりその客観性を重要視しようとする傾向があるので、全体としては降誕の出来事の叙述は、細かく、網羅的な印象

を受ける。

今、気づくことを三点だけあげておくと、一つ目は、聖書にはその事柄として描かれていない「宿探し」が聖書物語の多くには入れられていることである。このことは聖書物語が必ずしも聖書だけではなく、「いわゆる降誕物語」として知られている降誕の出来事にも扱っていることを示している。

二つ目は、マリアがエリサベトのところに赴き、その後ヨセフに迎えらるまでの流れを記しているものが比較的少ないということである。子どもに伝えることが難しいと判断したからであろうか。それともあまりその必要性がないと判断したからであろうか。

三つ目は、イエスが命名され、神殿で捧げられるという場面を扱っているものが極めて少ないということである。子どもに伝えるということを考えるとき、一人の人間の赤ちゃんの時期を扱ったこれらの叙述は、ある意味では重要なことであると思われるので、個人的にはもう少しそのような部分を扱った物語があってもよいように感じている。

## 第五章 絵本にみる降誕物語 (2) - その個別的考察 -

### 1 「いわゆる降誕物語」に即した作品

まず「いわゆる降誕物語」に極めて忠実な作品から六つ紹介をしよう。

その第一は、『イエスさまのたんじょう』(→6)である。これはもともとオランダ聖書協会が1966年に出版されたものを日本聖書協会が8年後の1974年に日本語を付けて出版したもので、20年以上の歳月が経過しているが、今日もなお親しまれている。



イエスさまのたんじょう

文も各ページ2、3行で、またケース・デ・コートによって描かれた絵の方も、その色遣い、顔の形、目の表情などから、優しさ、暖かさ、そして降誕の出来事の慎しさが伝わってくる作品である。ヨセフとマリアのベツレヘムへの旅に始まり、馬小屋での誕生、羊飼いへのみ告げと彼らの礼拝、三人の博士の礼拝と、簡潔な運びの中で降誕物語の重要なポイントがすべて収められている。

第二は、トミー・デ・パオラの『クリスマスものがたり』(→42)である。これは舞台仕掛け絵本となっており、マリアがガブリエルからみ告げを受けるところから始まり、ヨセフとマリアの宿屋探し、羊飼いと三人の賢い王が登場して、最後はクリブ(イエスの誕生のお祝いにつけられた羊飼いや博士を形づくった人形のこと)さながら、これらの人々

がいっしょに生まれたばかりの赤ちゃんイエスを拝んでいる場面で終わっている。絵本の性質上、言葉は少ないが、その分、短い表現の中で全体がわかりやすく描かれており、降誕物語のドラマ性が感じ取れる作品である。

第三は、ジェーン・レイによる『クリスマスのおはなし』(→33)であるが、その文章においては特に目新しいことは見当たらない。しかしその絵のタッチは、かなり目を見張るものがあり、金色をふんだんに使用し、黒髪と黒目のヨセフとマリアが描かれていて、この出来事が東方の国で起こった荘厳なことであることを示しているように思われる。

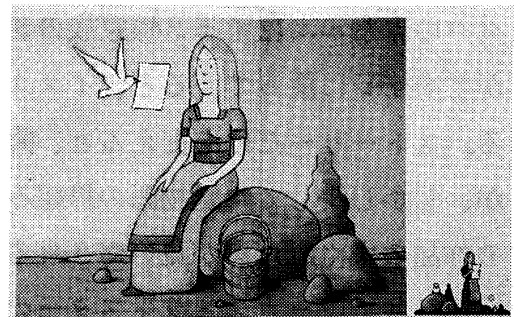
「いわゆる降誕物語」が、もともと『マタイによる福音書』と『ルカによる福音書』とを結びつけるところに成立したとするならば、その二つの福音書を、聖書に従ってもっとも忠実に結びつけようとしたのが、四番目に紹介するフェリクス・ホフマンによる『クリスマスのものがたり』(→38)である。その分、文章は各ページ多少長めになっているが、ガブリエルによるみ告げ、人口調査の命令、ベツレヘムへの旅、馬小屋での誕生、羊飼いへの天使の知らせ及びイエスを探し当てる場面、三人の賢者の旅の始まり、ヘロデとの会見、イエスへの礼拝、賢者たちの帰路の際の迂回、エジプトへの逃亡、ヘロデの怒り、ナザレへの帰還と、かなり盛り沢山に描かれている。マリアの姿が非常に現代的に描かれているのも印象的である。

第五は、「ミッピーちゃん」シリーズで日本人にも馴染みのディック・ブルーナの『クリスマスってなあに』(→26)である。独特の親しみやすいタッチで描かれていて、子どもたちにとっては降誕物語が私たちの世界と連続した身近な出来事として感じ取れるのではないと思われる。



クリスマスってなあに

最後は、ジョセ・ゴフィンによる『しずかなしずかなクリスマス』(→49)である。原題は、〈NOEL SANS PAROLES〉となっており、言葉を一語も入れずに著したクリスマスという意味である。従って、「しずかな」と訳されたのは、言葉がないということと、聖なる夜の静寂さとの両方を意味していると思われる。マリアがみ告げを受ける場面は、この作品では興味深いことに、天使を登場させず、鳩が一枚のメッセージの紙をマリアに届けるという形で描かれている。次いで、ヨセフとマリアのベツレヘムへの旅、馬小屋での誕生(それを見つめる動物たちの姿も描かれている)、また羊飼い、



しずかなしずかなクリスマス

三人の王様たちが一緒にイエスを拝みにやってくる事が描かれている。なお、この作品で一羽の鳩が、イエスが誕生する場面や、イエスを礼拝する場面など、要所要所に登場している。

\* \* \*

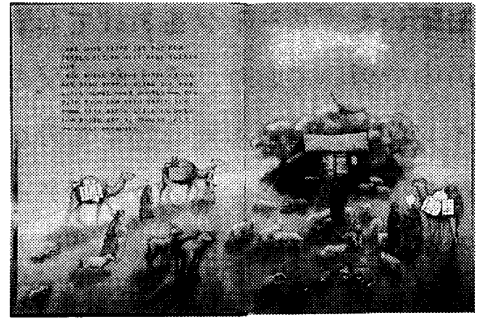
次に、降誕物語に基本的には従いながら、随所に想像力を働かせながら言葉を補った作品を三つ紹介しよう。

その第一は、『クリスマスのはじまり』(→35)である。一枚一枚の絵は金色で縁どりされているが、絵のタッチはとても柔らかく、ユダヤの土地の温りが感じ取れるほどである。また、ベツレヘムへの旅の途中で雨が降ってくる場面、他の旅人と出会って語り合う場面、エレサレムの混雑ぶりなどが描かれたり、宿屋探しの場面での会話が克明に記されていたり、三人の王様が大行列でベツレヘムに向かっていく場面があったりで、聖書の記事をもとにしながら、かなり想像力を豊かに盛り込んで話を作ったという印象を受ける。

第二は、ブライアン・ワイルドスミスによる『クリスマスものがたり』(→41)である。第一にあげた『クリスマスのはじまり』が降誕物語のそれぞれの場面、また物語の進行の詳細に想像力を働かせてストーリーを膨らませたものであるならば、こちらの作品は、降誕物語の中に新しい人物を登場させて、物語をその角度から描いたものと言えるだろう。具体的に述べると、マリアとヨセフが連れていったロバには赤ちゃんがいたが、その赤ちゃんは母親がいなくて寂しさのあまり食事も咽を通らないほどであった。その留守を二人から頼まれた女の子レベッカが赤ちゃんロバを連れて母親探しに出かけるのである。途中で、ヘロデを取り巻く兵隊、羊飼いに会い道を尋ねる。さらに、羊飼いがみ告げを受けている場面に遭遇し、星に導かれて宿屋の方に向かって宿屋の主人に尋ねると、馬小屋を指差され、そこでついに彼女は三人の王様といっしょにイエス様と会い、赤ちゃんロバも母親に会えて大喜びとなる。レベッカはその後、王様のラクダに乗せられて無事家の方へ、またロバの赤ちゃんはイエス様家族のお供で、お母さんロバといっしょにエジプトに行き、やがてナザレに戻ってくると、イエスはレベッカと仲良く幼年時代を過ごすというお話である。ストーリーだけを捉えると、降誕物語とは別のものを扱っているという印象も受けるが、しかし決して降誕物語の枠組み、構成を崩すことなく、それを保っているところにこの作品のすぐれた点が見いだされる。

第三は、マークス・フィスターの『クリスマスのはし』(→37)である。天使のみ告げを受けた羊飼いたち、また東の方の王様たちをイエスの馬小屋と結びつけるものは何か。それは、この原題の〈Der Weihnachtsstern〉にも記されているように星である。星は、確かに『マタイによる福音書』の文脈では、学者たちをイエスの誕生場所へと導いていく役割を果たしているし、『ルカによる福音書』の文脈では登場しないが、天使から「飼葉

桶に眠っている赤ちゃん」を知らされたものの、どのようにしてそれを探し当てたのかということに対する答えともなりうるものである。つまり、夜中、暗がりの中で、羊飼いは星を頼りにイエスの居場所を探し当てたのである。実際このような発想をしている絵本は他にも見られるが、この作品は星の描き方も非常に美しく、特に、銀色でちりばめられている星が羊飼いたちをベツレヘムに導くとき、一つの大きな道しるべの星となるのは印象的である。



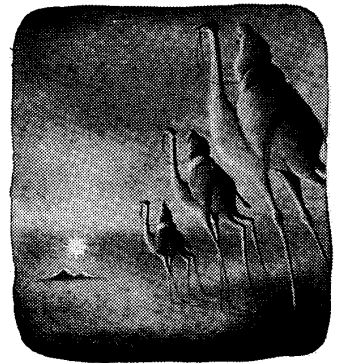
クリスマスほし

## 2 『マタイによる福音書』、『ルカによる福音書』に即した作品

まず『マタイによる福音書』に即した降誕物語の中から二つ紹介することにしよう。

一つは、『ほしをおいかけて』(→71) という作品である。

星を観察しながら不思議な赤ちゃんに会えることを期待していた博士ガスパルは、宮殿でもう一人の博士メルキオールに会うが、その宮殿の赤ちゃんが救い主かと思った途端、星が別のところに行ってしまう、次に美しい町の宮殿でまたもう一人の博士バルタザールに会うが、その宮殿の王の赤ちゃんこそが救い主だと思っていたらまた星が別の所に行ってしまう。とうとう彼らはヘロデ王の所に赴くが、あれこれとしつ



ほしをおいかけて

こく質問されるうちに、嫌な気持ちになり、落胆のうちにそこから出発したところで羊飼いたちと出会い、彼から不思議な赤ちゃんと出会ったことを聞き、馬小屋まで案内してもらい、そこに星が再び現われ、三人で拝み、幸せな気分の中に以前の宮殿のことも、ヘロデ王のことも忘れて帰っていくという話である。基本的に、『マタイによる福音書』2章1~12節の部分を扱っているが、エルサレムでヘロデ王に会見した後に、彼らに先立ってイエスの誕生に駆けつけた羊飼いと会って、しかも馬小屋まで案内されていくという、いわば『ルカによる福音書』のモチーフが使われているのは興味深い。

もう一つは、『クリスマスのおくりもの』(→29) という作品である。三人の王様(この作品では博士でも賢者でもなく王となっている)のうちの一人バルサザールは新しい星を見つけ、家来たちと共に旅に出かける。その王子イレヌスはいっしょに行くことを許されなかったが、大切な三つの宝物を持って後から出かけた。即ち、ボールとすてきなえほんと子犬のプルトンである。しかし旅の途中で悲しんでいる女の子にボールをあげ、病気のおじいさんには絵本をあげ、そしてついに足の悪い同い年くらいの男の子には大切に

していたプルートをあげてしまい、悲しい気持ちの中で道を歩いていくと一軒の家が光の中で輝いており、そこには父のバルサザールと他二人の王がイエスの周りを囲んでいた。イレーヌスは何も差し出すものがないが、マリアさんに三つの宝物のことを話し、暖かく抱き寄せてもらおうという話である。確かに、『マタイによる福音書』をベースにはしているが、かなり脚色性が高く、またその焦点は博士たちの贈り物の箇所には象徴されるごとく、「本当の贈り物とは何か？」というところにあるように思われる。

\* \* \*

次に『ルカによる福音書』に即した降誕物語の中から二つ紹介することにしよう。

一つは、『かみのははマリヤ』(→16)である。この作品は、マリヤが天使によるみ告げを受けた後、エリザベスのところに滞在する場面がまず描かれている。30ページのうち13ページがそれに割かれており、その中にはマリヤとエリザベスが天使について語り合う場面、さらにザカリヤが口を利けなくなったことへの言及も含まれている。エリザベスのもとから帰ったマリヤはヨセフとともにベツレヘムに行くが、馬小屋で赤ちゃんを生み、そこに羊飼いたちが駆けつけて拜むところで話は終わっている。原題は、〈Mary's Story〉となっており、いわばマリヤが母親になるという話であり、イエスを身ごもったところに焦点をあてている点で興味深い。

もう一つは、ピアッテイの『きよしこのよる』(→18)という作品である。こちらの方は、基本的に『ルカによる福音書』2章1～21節までを扱っている。すなわち、話はローマ皇帝の命令による人口調査の場面に始まり、ベツレヘムへの旅、宿探し、羊飼いへの知らせ、イエスを拝み、さらに人々へ伝える場面である。原題は、〈The Holy Night〉とあるように、イエスの誕生を羊飼いたちが厳かに拜むところにそのクライマックスがおかれている。

### 3 降誕物語の登場人物の立場から描かれた作品

#### (1) 子どもや動物たちの立場から描かれた作品

ここでは、子どもや動物たちがイエスの降誕を何らかのかたちで見る、立ち合う、共に過ごすという作品を取り上げたい。イエスが愛され、小さく弱い立場の象徴とも言える子どもや動物たちが、最初のクリスマスの祝福に与るといふファンタジー溢れる物語は以外に多く、作者たちの暖かいまなざしを感じるものである。

『きつねののぞいたクリスマス』(→17)は、きつねが主人公で語り手となっている。きつねは羊飼いたちに告げられた天使の声を茂みの中で効き、羊飼いたちの後をついていく。ついていったところには救い主が眠っている。不思議なことに、めうし、やぎ、ひつじ、ねずみたちはきつねの存在を恐がらないのである。羊飼いは、女の人にこひつじを差

し出す。その様子を見ながら、きつねは「世界中でイエスさまの誕生に立ち合ったきつねってそういないんじゃないかな」とつぶやくという話。

『クリスマスのひかり』(→30)は、力ある王さまの中の王さまが来られるといううわさを信じ、国中の人びとがその出現を待ち望んでいるがその中でもりっぱな羽が自慢のくじゃくは、力ある王さまの中の王さまにその羽が気に入られることを確信する。馬は、王さまの直属の馬になることを夢み、猟犬は、力強さで勝負しようとする。他のたくさんの動物たちも王さまの未来についてあれやこれやとおしゃべりをする。しかし、ロバとウシは、労役に疲れおしゃべりどころでない。夕方には、ねぐらの洞穴に連れていかれるのである。そこにひとりの男とその奥さんがとぼとぼとやってくる。ロバとウシは気の毒に思い、暖めていたわらのベットをゆずる。眠ってしまった彼らは、まぶしい光に目を覚まし、みんながまっていた王さまが今ここにいることに驚き、息で赤ちゃんを暖めようとする。この物語は、ロバとウシという身近なしかも地味な家畜が、彼らのできる精一杯の喜びを息で暖めるという行為で現すという贈物の精神がそのポイントになっている。このような物語は、中世来の伝説を元にした絵画が残されていることから、その中に込められている精神を大切に伝えていきたいものである。

『ベツレヘムのうしごや』(→62)は、うしごやが主人公という大変ユニークな設定で、うしごやが主のご降誕に立ち合った話。

『やどやのむすめのクリスマス』(→80)は、アビゲイルという評判の手に負えない少女が主人公である。アビゲイルの家は宿屋。ある夜、すぐにも赤ん坊が生まれそうな若い夫婦がたずねてくる。お父さんは、馬小屋を貸すのであるがその夜、アビゲイルは夢のなかで天使のみ告げを聞き、馬小屋に行ってみるとそこで信じられない光景を見る。そしてマリアとヨセフとの会話を通し、目の前の赤ん坊が私のために与えられたことを知る。アビゲイルは、「かみさまは、わたしのことをあいしてくださることをしめそうとして、あかちゃんをおくってくださったんだわ。かみさまは、わたしのしたわるいことをぜんぶゆるしてくださったんだわ。かみさまがわたしのことをすきだといってくださいから、わたしは、もうひねくれないわ。あした、めがさめたらほんとにわるいことはやめましょう」と心に決める。

この物語は、少女のいたづらがいきいきと表現されているところや、子どもだけではなく誰でも持っているひねくれた心、すなわち、愛されていることを実感出来ない人間の弱さがみごとに描かれているところなど共感を呼ぶ作品である。

『ひつじかいのふえ』(→58)は、小さい男の子が主人公である。羊飼いのおじいさんは、羊の番をしながら孫である男の子に、いつかこの世に来られるという王さまの話をしている。仲間の羊飼いたちはそんな話は、遠い言い伝えだとばかりにする。しかし、どうし

たわけか男の子は、王さまは、金のかんむりをかぶり、銀のかたなをもち、桃色のマントをひる返し、馬にのってさっそうとこの世に来られると思ひ込んでしまう。おじいさんは、なんとかして思ひ込みを直そうとするがうまくいかない。男の子は、新しい王さまが来られる日のために笛を稽古している。ある夜、大きな星が現れ、天使が救い主の誕生を知らせ、その日がやってきた。男の子は、誰よりも早く笛を抱きしめ星の示すところへ走っていく。男の子がそこで見たものは、飼い葉桶に寝ている赤ちゃん。男の子がイメージしていた王さまとは違うのである。がっかりしてそこを出ていこうとすると赤ちゃんが泣きだす。男の子は、ききたくなかった泣き声に耳をふさいで走りだす。泣き声は男の子を追いかけて、とうとう男の子を赤ちゃんのところへつれ戻した。男の子がおもわず笛を取り出して吹いてみると、赤ちゃんは泣き止み、男の子をみてニコッとする。赤ちゃんの笑顔が、男の子の心を満たす。金のかんむりや銀のかたなではなく。

このテーマの最後に取り上げる作品、『羊飼いの四本のろうそく』（→ 59）も小さい羊飼いの男の子シモンが主人公である。一緒に登場するものは、兄のヤコブと白いこひつじ、そしてアブドンという羊の持ち主。ある時、羊の番をまかされたシモンがうたたねをしている間にこひつじがどこかへ行ってしまい、アブドンに探してくるように言われる。その時、アブドンは、旅人にもらった四本のろうそくをはめこんだランタンをシモンに渡す。旅人からの言葉、「このランタンがかならず道を示してくれる」とともに。シモンは、こひつじを探しながら、ろうそくを一本ずつ、どろぼう、怪我をしたおおかみ、こじきの各々にあげてしまう。最後の一本になってしまったとき、うたたねをしたときと同じような芳しい匂いがただよってきて、匂いを辿っていくとそこはみすばらしい馬小屋。入っていくと探していたこひつじのそばに、かわいらしい赤ちゃんがすやすやとねむっている。最後の消えいりそうだったろうそくは、見えない力にかきたてられるように、あかるく、あかるく輝きだし、馬小屋の中を光で満たした。作者が最後に付け加えているのであるが、この物語のこひつじが聖書の喩話である『いなくなった一匹のひつじ』を、またランタンがアドベントの四本のろうそくを象徴しているという。

絵本に上限はないのでその点では問題はないと思われるが、ストーリーの象徴性と複雑なところが下限について、すなわち、幼い子どもがストーリーの中にかいに入りこんでいけるか、また、アドベントの意味がどのように伝わるかについて考えさせられるところである。

以上、子どもや動物の立場から見た降誕物語の中から、印象的なものを選びだした。この物語に共通することは、両者の純粋な心であり、打算のない心の持ち主が偶然のように救い主の誕生に立ち合うことになるという点である。また、始めに述べたように、この両者が象徴することは、社会的な弱者にまっ先に福音（よきおとずれ、よきしらせ）が伝え



られたというところである。このような点がまさに、クリスマスの精神を具現していると思われる。

## (2) 『三つのクリスマス』(→72~74)

作者は、ナリニ・ジャヤスリヤというスリランカの女性である。表題にあるように、これは三つの小品から成っている。第一作の「ミラ星のひかり」(→72)は、神さまから造られたミラ星が、いつかきっと役に立つことを言われるが、東の国の博士たちが来るときに遂にその時が来たことを知らされ、彼らを馬小屋へ導くという話である。

第二作の「白い小馬アサ」(→73)は、兄弟と馬小屋に住む白い小馬アサが、そこにヨセフとマリアを迎え入れることになり、天使が歌う中でイエスさまの誕生を目撃するという話である。



三つのクリスマス

また第三作の「羊飼いの少年アクブ」(→74)は、夜の番のとき天使のみ告げを聞き、馬小屋で誕生を目にするというものである。

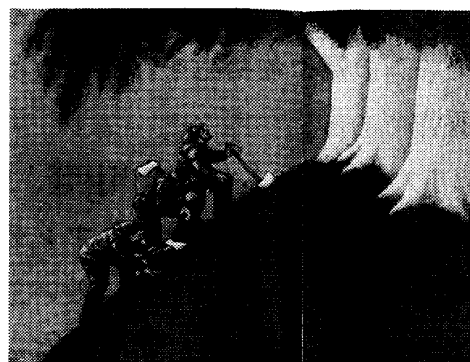
これらは、別々に描かれた三つの作品とも言えるが、ある意味では一つの出来事を三つの角度から描いている一つの作品と考えたほうがよいかもしれない。彼女の独特の絵のタッチ、また物語の神秘的な描き方(例えば、第二作においてイエスの誕生の瞬間は、天使が光を放って包み込むような仕方で覆われる)は、私たちに新鮮な印象を与えてくれる。

## 4 降誕物語を扱っているがかなり独創性の高い作品

### (1) イエスの生涯と関わりをもつ作品

イエスの生涯と関わりをもつ作品として、『3本の木』(→47)、『かがやく星を道しるべに』(→14)、『アンデレのふしぎな夜』(→3)を取り上げた。

まず、『3本の木』は、民話として語りつがれてきたものである。実は作者不詳の物語であることが、この本の作者によってはじめに前置きとして記されている。山のてっぺんの3本の木には、それぞれの夢があり、一本目の木は、世界一立派な宝石



3本の木

箱になること。二本目の木は、世界一大きな船になること。三本目の木は、このまま山にいて、人びとが神さまを思い出すようなのっぽの木になることであった。何年も何年もたち、木が切り倒される日がやってきた。一本目の木は、いよいよ夢がかなえられると思っ

ていると、家畜のえさ箱になり、二本目の木は、世界一の船ではなく、小さな漁船に。三本目の木は、太い材木としてそのままにされてしまった。それからまた、何年もたったとき一本目の木は、ある夜、金色のひかりに照らされて、女の人が抱いている赤ん坊を入れられ「自分は、世界で一番尊い宝物をお入れしているのだ」と気づく。二本目の木は、ある晩、旅人をのせているとき大嵐に合ったが、その旅人が「しずまれ」と手をのばすと嵐がぴたりとしずまり「自分は、天と地をおさめる王をお乗せしているのだ」と気づく。三本目の木は、今にも十字架によって処刑されようとしている人によって負われている自分を発見し、恐ろしさに震え「自分があらあらしくざんこくに」思えた。けれども、翌々日の日曜日、三本の木は、大地が喜びで震え、神様の愛で全てが変えられたことを知る。一本目の木は、真実に美しくなり、二本目の木は、真実に強くなり、三本目の木は、それを人びとが思うとき神様のことを考えるようになった。この物語（民話）は、直接的な降誕物語ではないが、イエスの誕生と全生涯が、死と復活という出来事によって意味あるものになることを強調し、示していると言える。

『かがやく星を道しるべに』は、見開きで美しく描かれた羊飼いの場面（絵のみ）から始まっている。天使のみ告げの様は、空から舞い降りた天使がいかにもそのように印象的である。羊飼いたちが、出会う人びとを誘うが、その人びとは、一緒に行くことを断る。その理由がそれぞれ、イエスの生涯を象徴的に表している。はじめの人は、将来その方がきっと使われるはずの水を守るため行くことができないと言い、次の漁師は、いつかその人が入り用とする魚をとってさしあげるためであり、その人も漁師になられると言う。また、農夫は種を蒔く方がおいでになるからという。一組の夫婦は葡萄を摘んで、その方の為に葡萄酒を作るためと言う。絵もストーリーも深くイエスの生涯を考えさせる秀作である。

『アンデレのふしぎな夜』は、上の二つが海外の作品であるのにたいして、日本の作品であることに注目したい。アンデレという少年が主人公で、ひいお姿ちゃんとの対話形式になっている。アンデレは救い主の誕生を知り家を飛び出すが、途中、ひいお姿ちゃんのアンナ（預言者）の家に立ち寄る。一緒にいこうと誘うが、アンナは時間がないという。それは、一枚の布を織るため。その布は、あの方が十字架から降ろされた時、あの方を包む布。アンデレは、その方は、どんな方かと聞く。アンナは、その方は、人びとを神様のもとへひきあげてくださる漁師であり、心の畑を耕してくださるお百姓、また、葡萄の木だとも言う。アンデレにはその方がどうして、十字架にかからなければならないか理解が



かがやく星を道しるべに

できない。アンナは、小さな布を持って、あの方の涙をふいてあげるように言う。アンデレは、途中、ふしぎなまぼろしを次々に見る。そのまぼろしとは、子どもと母親の泣き叫ぶ様子。貧しい人びとやさげすまれている人びと。アンデレはめざめ、闇の中を駆けぬけ、救い主の赤ちゃんのところへだどりつく。そして、マリアに小さなその布を渡すという物語。

## (2) 現代と関わりをもつ作品

ほとんどの作品は今から2000年前に遡り、イエスの誕生の出来事を扱っている。ごく当然のことであるが、中には現代にいる人が突然ワープして2000年前の世界に行ってしまうような作品もある。葉祥明の『ほしのひかったよる』(→69)がその例である。

お星さまにお願いをしている少年が急にそのお星さまに呼ばれると、そこは2000年前のユダヤ。女性を乗せたラクダと一人の男性が歩いている。遙か前方にそれを見ながら、これこそ自分の行く道であると思い、少年はついていく。やがてそこは小さな小屋となり、そっとのぞいてみると赤ちゃんが飼葉桶に寝かされている。少年はなぜかとても嬉しい気持ちになる。ここには、特に赤ちゃんがイエスであり、男性がヨセフであり、そして女性がマリアであるという言及はないが、明らかに降誕の出来事とわかる作品である。言葉多くは語られていないが、少年の心が降誕の喜びに触れたことは間違いなく実感され、2000年経った私たちが降誕の出来事を迎えることの意味を考えさせられる秀作である。

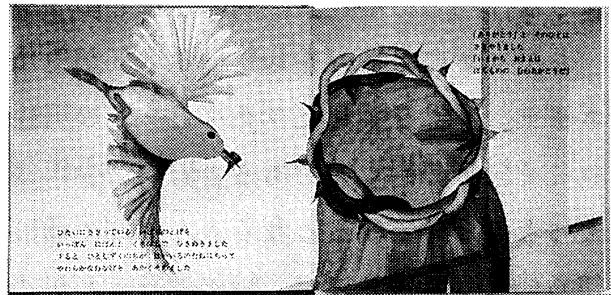
## (3) 伝説を絵本化したもの

ここでとりあげる作品は、ラーゲルレーブの『キリスト伝説集』<sup>(13)</sup>が元になっているもので、『へいしのなみだ』(→60)『ベツレヘムのはちとゆり』(→63)『ろびんのくりすます』(→81)、そして『きよしこのよる』(→18)である。スウェーデンの女性作家セルマ・ラーゲルレーブ(1858~1940)は、ノーベル文学賞最初の女性となったスウェーデンを代表とする作家である。『キリスト伝説集』は、『エルサレム』(著名)のための取材旅行のみやげ話ともいわれるもので、作者の暖かい人間愛の伝わってくる感動的な作品集である。『へいしのなみだ』、『ベツレヘムのはちとゆり』は、原題が『ベツレヘムの子ら』で、いわゆるクリスマスの子ども殺しにまつわる話である。物語は、花粉がいっぱいついて飛べないはちを一匹ずつ巣に運んでやったり、水がたまって重そうなゆりの花びらから水をこぼしてやるというような心やさしい男の子を、あるローマ兵が「変わったことをする子どもがいる」と見ているところから始まる。ある日照りの厳しい日、兵士はどうしようもないほどのどが乾いていた。そのとき、その変わったことをする男の子が手に汲んだひとしずくの水をあげる。

ある日、ヘロデ王は、お城に男の子を持った母親と子どもを招待し宴をもうけた。しかしそれは、殺しの宴であった。その時、一匹のはちが兵士の目を刺し、そのすきに逃げた

親子がいた。執拗に探していた兵士は、夜明けにベツレヘムの町を出ようとする二人連れを立ち止め、女のマントをあけさせるが、その中は白いゆりの花束であった。その場は逃がしてしまうが、疑いは消えず、とうとうある洞穴まで追い詰める。そこには、兵士にいつか水をのませてくれた男の子と一組の夫婦が寝ていた。目を覚ました子どもの目をじっと見ていた兵士は、「この方こそ平和の王だ」とつぶやき、この方に従っていこうと心に決める。絵本には、文字数の限界があり、表現されていないが、原作にはローマの支配の中で怯える民衆とその当時の雰囲気と迫力をもって描かれている。そして、キリストの象徴としてのゆりといのちの水が物語を神秘的に彩っている。

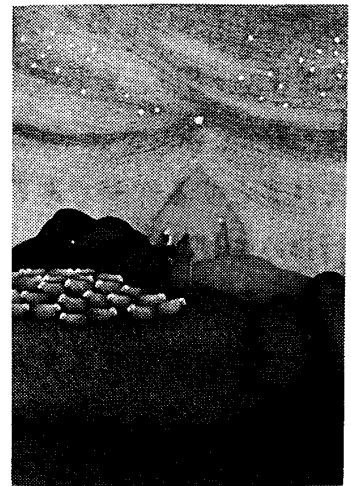
『ろびんのくりすます』は、おそらく原作『むねあかどり』<sup>(14)</sup> をヒントにして作られたものと思われる。神様が天地の全てをつくられたはじめ、むねあかどりと命名されたにもかかわらず灰色であった鳥は、代々そのことを無念に思っていたが、救い主の誕生にかけつけた時、赤ちゃんを暖め



むねあかどり

ていた焚火が消えそうになっていることに気づき、羽が血に染まるまで必死になってあおぎ続ける。その時、鳥のむねが赤く染まり、それ以来、名実共にむねあかどりとなるという話。原作は、キリストが十字架にかかり、額に茨がささっているのをこの鳥が引き抜いてあげ、その返り血でむねがあかく染まるというもの。

もう一つ、付け加えたい作品は、『きよしこのよる』である。この作品は、『キリスト伝説集』の最初に載せられているが、作者によって伝説ではないということわりがきが書かれている。この話は、作者が幼い日、家族がクリスマス礼拝に出掛け家に残された時、祖母から聴かされた忘れられない物語として紹介されている。



きよしこのよる

物語は、一人の男が赤ん坊が生まれたのに暖める火種がなく、家々を回るが誰も戸を開けてくれず、困りはてて町外れの羊飼いに火種をもらおうとやってくるころから始まる。羊飼いの足下には、大きな三匹の犬が寝そべっており、男が

近付くと大きな口をあけて飛びかかってきた。けれども男は怪我一つしなかった。男は焚火のそばまでいこうとするが羊がぎっしり寝そべっている。それで、男は羊たちの上を歩いていくが、羊たちは一匹も目を覚まさない。男が火のそばに立ったとき、その様子をずっと見ていた羊飼いがつえをふりあげ男めがけて投げ付けるが、つえはわきにそれてしまう。

男が火種をわけてくれるように頼むと、羊飼いは今までのことをうすきみわるく思い、しぶしぶ承諾する。男は火種の赤く焼けているすみを両手に持ち歩きだした。それでもやけどもしない。男はますます不思議に思い、男の後を追いかけて山の小さな洞穴まで辿りついた。そこで羊飼いは、奥さんと赤ん坊が寒そうにこごえそうになっている光景を見た。心の冷たいはずの羊飼いは、生まれて初めての感情になり、持っていた毛皮を取り出し、「赤ん坊をこのうえに寝かせてやりな」とおもわず言ってしまう。羊飼いがそういった時、更に不思議なことが起こった。「ひつじかいの目は、いままで見えなかったものを」見、「ひつじかいの耳は、いままで聞こえなかったものを」聞いたのだった。羊飼いの目には天使たちが、この洞穴をとり囲むようにしてそこらじゅうにいるのが見え、うれしそうな歌声も聞こえてきたのだった。ここまで話して、おばあちゃんは最後に次のように作者に言った。「わすれるんじゃないよ。みんなほんとおこったことなんだからね。わたしがおまえを見ているように、おまえがわたしを見ているように。わたしたちの目にそれを見せてくれるのは、ランプのひかりでも、ろうそくのひかりでもない。たいようでも、つきでもない。たいせつなのはね、かみさまのみさかえをあおぐことができる目をもっていることなんだから…」静かな雰囲気が始一貫流れるこの作品は、このようなメッセージとともに降誕物語としては珍しくヨセフ（物語の中では、男と表現されている）が登場人物として重要な役割を演じている。また、「なぜ？」とがまんしきれなくなって聞く、聞き手の孫（実は作者）と「いまにわかるよ」と応える話し手のおばあちゃんとのやりとりが、何にも替えがたい幸せな思い出となっていることが、この伝説集の始めに掲載していることからわかる作品である。

#### (4) 『もう一人の博士』

ここでは、絵本でもなく聖書物語でもないが、キリスト教文学の世界的傑作といわれ、『アルタバン物語』、『イエスを求めて』等の題でも知られている『もう一人の博士』<sup>(15)</sup>を取り上げる。作者は、ヘンリ・ヴァン・ダイク（1852～1933）という、アメリカの牧師である。書名からもわかるが、降誕物語に欠くことのできない三人の博士については、聖書には三という明確な数字が出ているわけではないが、古くから、贈り物が三つであったことから、いつのまにか博士は三人であったという定説が出来てしまったのだろう（→第一章1）。おそらくそこから、作者のファンタジーと創造力により、このような物語が生み出されたのではないかと思われる。物語は、四人目の博士アルタバンが、星がのぼるのを見つけ出発したにもかかわらず、仲間と一緒に赤ん坊の主イエスを拝することができず、主のために持っていた宝物を方々探しながら歩くうちに、魂の試練を受けながら他のひとのために次々と捧げてしまう。丁度、主が十字架に架けられようとした日、最後の宝物によってその主を救えるかもしれないと思ったが、身売りしなければならぬ娘と出会い、最後

の宝物まで娘の手に渡す。その時、地震が起こり、老人の頭に重いかわらが当たる。老人の耳に聞こえてきた言葉は、「あなたによく言っておく。わたしの兄弟であるこれらのもっとも小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである」という美しい声。このようにして、出発してから33年目に、もう一人の博士は主と出会った。大きな望みを一点にしぼりもちつづけ、不思議な方法でそれがかなえられるというこの物語は、直接的な降誕物語ではないが、クリスマスに因んだ物語としてよく知られ、格調高い作品としてどうしても外すことのできないものである。

### おわりに ～今後の課題として～

以上、降誕物語を扱った絵本を中心に考察を進めてきた。この論文は、「はじめに」で触れたように、「クリスマスが子どもたちにどのように伝えられているか」ということを絵本を中心にみようとするものであり、前回のサンタクロースについての考察の続きとして書かれたものである。確かに、降誕物語がクリスマスの中心にあるということについて異論を唱える者は誰もいない。その意味で、私たちは前回の論文と較べて、より一層クリスマスの中心に迫りえたという確信がないわけではない。しかし、果たしてどのようにそれがクリスマスの中心であるかということについては明確にされていない。そのためには、もう一度クリスマスを扱った絵本全体の中で検証しなくてはならない。しかしこの論文ではそこまで扱うことは出来なかった。

また、子どもたちにイエスの誕生の出来事がどのように伝えられているかということを見るためには、子どもたちの側から、イエスの誕生という事実を自分たちとの関係でどのように受けとめ、また祝っているかということ調べる必要があったかもしれない。私たちはここで「イエスの誕生を祝うことは、幼な子の場合、現実には、子ども自身の誕生の祝われ方、自分の成長、その喜びを親や友達と共にどのように分かち合ってきたか、その積み重ねからも出てくるように思われます」と書かれている言葉<sup>(16)</sup>を謙虚に受けとめたいと思う。しかしこのことを明らかにするためには、幼稚園や保育園などの現場の声に耳を傾けることが必要不可欠なことになり、当然それをここで扱うことは出来なかった。

また、第五章について、今回は基本的に作品を紹介をするという形式をとり、その中に絵本の独自性や目新しいと思われる点を、気づく範囲で盛り込んでいくことにした。しかしその半面、複数の作品をある特定の観点から比較検討するというような考察は十分に展開できなかった。

さらにまた、聖書物語やイエス伝については、今回はそこから降誕物語だけを取り上げ、

クリスマスという出来事に限定して考察したが、本来それは、より広いコンテキストで捉えられるべきものである。つまりそれは、「一体子どもたちに聖書はどのように伝えられるべきか」「イエスはどのように伝えられるべきか」という問いと深く関連してくるものである。

この論文で十分に扱うことの出来なかったこれらの事柄については、すべて今後の課題としたい。

—注—

- (1) 尾上明子・菊地伸二「絵本にみるクリスマス—サンタクロースを中心に—」(『柳城女子短期大学研究紀要』第17号、1996年)
- (2) 絵本だけではなく、聖書物語(イエス伝も含めて)も含まれている。
- (3) 『クリスマス小事典』(遠藤紀勝・大塚光子著、1989年、社会思想社) pp. 22~23より引用。但し一部修正。
- (4) 以下、「いわゆる降誕物語」という言い方を用いる。
- (5) 番号については、第二章 2 リストを参照。
- (6) 『最初のクリスマス』(P. L. マイヤー著、山田直美訳、1992年、日本基督教団出版局)によれば、イエスが生まれた場所はベツレヘムの岩屋となっている。そのpp. 59~74を参照。
- (7) 『世界のクリスマス伝説』(ハゼルティン文、大久保エマ訳、1976年、女子パウロ会) pp. 5~14に所収。
- (8) 『最初のクリスマス』(前掲書)のpp. 86~100を参照。
- (9) 『降誕物語のおけるキリスト』(R. E. ブラウン著、生熊秀夫訳、1996年、女子パウロ会) pp. 19~26を参照。
- (10) 『子どもと祝うキリスト教の祭り』(R. シントラー著、加藤善治・茂 純子・上田哲世訳、1995年、日本基督教団出版局) pp. 24~25。
- (11) 『世界のクリスマス伝説集』(上澤謙二編、中央出版社)。
- (12) 『キリスト伝説集』(ラーゲルレーブ作、インガオサム訳、1995年、岩波書店)。
- (13) (12)に同じ。
- (14) 『むねあかどり』(ラーゲルレーブ文、中村妙子訳、高橋ユリ絵、1989年、日本基督教団出版局)。
- (15) 『もう一人の博士』(ヴァン・ダイク文、岡田尚訳、佐藤努絵、1983年、新教出版社)。
- (16) 『子どもと祝うキリスト教の祭り』p. 179。